復興塾通信

３号

平成１２年４月

どこに向かう「あいウォーク」

小森　星児（復興塾塾長）

komori@kobe-yamate.ac.jp

震災５周年の１月は慌しかった。復興塾恒例のあいウォークに加え、シンポジウムや記念行事が数多く開催された。いろいろな事情で、筆者はあまり参加できなかったが、若干の感想を記しておきたい。

まず、いわゆる検証について。為政者は成功しか関心がなく、研究者は失敗から教訓を学ぶ。だから兵庫県が復興の国際検証に着手すると聞いて驚いたが、結果は研究者が為政者の目で評価することだと分かって納得した。復興塾の講延に列すれば見方が違ってきたのではないかと惜しまれるが、検証の検証は最終報告を待つことにしよう。

次に２回目を迎えたウォークについて。生憎の天候にもかかわらず、参加者、募金額とも昨年の１割減にとどまったのはそれなりの成果といえる。さらにボランティアや沿道サービスを含め参加型イベントとしての特色が発揮できたのも高く評価できよう。協力依頼が遅くなったにもかかわらず、地元の大学や高校から多くの学生生徒が誘導係として参加したのは感激であった。また、出発地点でのチアリーダーの演技やスタンプポイントでの暖かい飲食提供など自発的なイベントで大いに盛り上がった。参加者のアンケートを読むと、知らない場所を大勢で歩くウォークは面白い、また来年も参加したいという声が多数を占めている。世話役として、なによりの励ましであった。

しかし、募金活動として評価するなら、ウォークは完全に赤字である。表面上の収支はともかく、事務費や制作費を善意に頼り、ボランティアに交通費も出せないようでは永続させることは難しい。その原因は、本家のエイズウォークと比較すれば直ちに明らかになる。サンフランシスコの場合、参加者は神戸の１０倍、募金額は１００倍である。少額の寄付でも所得から控除できる税制上の優遇措置もさることながら、友人や勤務先など他人の寄付を預かってくるという仕組みが働かないのが神戸の最大の弱点である。

最初の年は、しみん基金・ＫＯＢＥのＰＲという目的があった。しかし、今後は言い訳にならない。なんとか企業単位、団体単位の募金を集める工夫が必要である。去年は山手女子中・高校のＰＴＡ、今年はさくら銀行の団体参加があった。こうした参加を呼びかけるのは一匹狼の多い復興塾の苦手とするところである。だから来年はイベントの準備と募金を分離して、団体募金担当をしみん基金側にお願いしてはどうだろうか。

人の真似をしない、同じことを繰り返さないのが復興塾のモットーである。

できれば来年は、また新しい企てに挑戦しようではないか。

第２回アイウォークにて
学生ボランティア達と

コラム　言いたい放題

最近の子供たちは、スポーツをする時の組分けで、強いチームと弱いチームを作るそうだ。当然、いつも強いチームが勝つ。だから、「へた」な子は、いつまでも弱いチームで勝つことができない。東京の知人から聞いた話である。

私なんかの時代だと、強さが均衡するようにチームを作って勝ったり負けたりすることを楽しんでいた。たしかに、負けることは悔しいけど、勝つときもあるから一生懸命する。それがスポーツのおもしろさだ。

常に勝つチームを目指す。それはスポーツとしては当たり前の目的である。しかし、それは試合を通じて、競争の中で達成されるべきもので、しかも、そのことによってそのスポーツそのものの底上げも達成されることになる。それを、「うまい」選手、「欲しい」選手を片っ端から集めてきて、「常勝チームを！」なんてうそぶいてい「おとな」がいるんだから、子供たちがまねをするのも無理はない。

今年も弱いあのチームを応援しよう。というより、あのつまらんチームが負かされるのを楽しみたいと思っている。

M生

オピニオン

「もう5年・・・」あるいは「まだ5年・・・」

しみん基金・KOBE　理事長　黒田　裕子

あの「１・１７」から満５周年が経過した。

「もう　５年・・・」あるいは「まだ５年・・・」思いは複雑である。

緊急避難所から仮設住宅支援へと走り続けてきた５年であった。仮設住宅は解消して８割復興といわれるが、残る２割の復興の重さを忘れる訳にはいかない。

「２割」の復興は言い換えれば神戸だけではなく、これからの日本の近未来にどのような市民福祉社会を基く事が出来るかに関わるのである。高齢・痴呆・虚弱・アルコール依存・失職による所得減が仮設住宅顕在化した。そしてこれらの状況に対してこれまでの福祉行政では、数でも質でも賄いきれないことが仮設住宅に拠点をおいての２４時間体制の活動で明らかになったのである。

仮設は解消されたものの恒久住宅へ転居しても生活が元に戻った訳ではない。いやこれからはもっと支えあうことができ、心豊かな生活が出来るシステムの構築が必要である。復興が進むにつれてボランティアは減少すると共に、財政面での困難にもぶつかっている。

そんななかから「しみん基金・ＫＯＢＥ」が９９年７月誕生した。

一人一人の市民が市民活動を支え、育てていくための財政援助の仕組みを確立させている。もちろん募った基金の一円でも無駄にしないため、助成を受ける団体の審査も厳密に行なう。また、自立した人材や組織を育てるために予算や運営管理等のアドバイスも兼ねて行なう。市民活動もそれぞれが自分の足でしっかりと立ち上がることが大切である。また、理念を持ち、知識や技術を磨くことも必要である。そうやって意識を高めて、市民活動を社会に根付かせていきたいと考えている。

１２月１日には第１回公開審査会を経て１５団体が助成を受けたのである。この助成金には復興塾企画による「ｉウォーク」から多額の財源支援があったことはもちろんであり、心からのお礼を申し上げると共に、復興塾の市民社会を見越した企画力に深く敬意を表すところである。今後は運用財産を募るため、さまざまな形で一般市民、企業などへ寄付をアピールしていきたいと考えている。また、こうして、市民の力が育つことにより行政から仕事の委託なども積極的に受けていきたいものである。

お互いに支えあい自立することこそ、21世紀の新しい社会において、市民福祉社会が実現でき安全・安楽・快適に暮らすことができるのではないかと考える。

（お問い合わせ）
「しみん基金・KOBE」事務局
〒６５１－００９５
神戸市中央区旭通１－１－１－２０３
TEL　０７８－２３０－９７７４
FAX　０７８－２３０－９７８６
E-Meil　kikin@stylebuilt.co.jp

神戸復興塾　塾生の論説

医師の目からみての震災は何だったのか？

上田　耕蔵（神戸協同病院　院長）

阪神大震災は日本が初めて経験した高齢社会型震災であった。震災は社会の歪みを余すところなく露呈させたが、同時に21世紀超高齢社会にむけて貴重な経験を積み重ねることが出来た。被災地は他地域より５～10年早く「福祉」「住まい」と「コミュニテイ」の課題に直面することができたともいえる。

医師の目からみてこの震災は何だったのか？

① 直後、医療は奮闘したが無力だった。大災害では行政もそうであるが医療も本来の機能を発揮できない。住民同志の助け合いが頼りとなる。被災病院の主要な仕事は重症者の転送だった。

② 「福祉が問われた」と思った。外傷による死者の52・5%が60才以上の高齢者であり、高齢者の被害が目立った震災であった。しかしびっくりさせられたのは、地震で怪我をしなくてもその後の生活環境の悪化のため肺炎、気管支
喘息、急性心筋梗塞、出血性胃潰瘍などの特定の内科疾患が急増した事である。
そして少なくない高齢者が死亡した。これは震災関連死と呼ばれたが、行政は災害弔意金追加認定者として救済した。神戸市の弔意金追加認定者（関連死）のうち60才以上が89．6%を占めた。（96年12月段階で、阪神大震災の直接死は5,524人、認定された関連死は919人、合計6，443人。）まず、震災で福祉が問われたと思った。

当時被害の大きかった市街地には福祉施設がほとんどなかった。神戸市の市街地の各区にはないかあっても1ヵ所しかなかった。神戸市の特養は全国の6割程度しかなく、しかも8割は郊外の区にあった。もっとまちの中に特養があれば虚弱な高齢者を早く保護できたのではないか、関連死をもう少し減らせたのではないかと悔やまれた。

③ 1日目は外傷であったが、2日目から3ヵ月間は内科の病気が急増した。
しかしずっと必要だったのは精神科であった。地震は住民から肉親・友人を奪い、自宅とまちを壊した。その人の財産と人のつながり、見慣れたまちの風景を一瞬で破壊した。地震は人のこころそのものに大きなダメージを与えた。避難所では24時間、救護所が置かれたが、被災者に安心を与えた。保健所に精神科救護所？？？されたが、こころのダメージは簡単にはとれない。被災者の心的間遠に長期的に対応するため、「こころのケアセンター」が設置された。こころの問題が大きくクローズアップされたのもこの震災の特徴であった。

震災直後は「福祉が問われた」と思ったが、しかし家が潰れる震災は一義的には「住まい」の問題であった。さらに福祉があって住宅があっても、高齢者は「まち」がなければ生きがいが持てないのを思い知った。自宅と家具と家族との暮らし、まちの風景と互いの交流が住民の「こころ」を形成していた。

住民は避難所から郊外の仮設へ移ったが、その遠い仮設から8割以上の患者さんは1～2時間かけて病院へ通ってきた。それは住み慣れた地域の風景を見たかったから、地元の人とうわさ話しをして安心したかったからであった。

震災を契機として被災者を守る多様な取組がなされた。福祉施設の建設、高齢者住宅などなどあるが、いずれも「まち」「コミュニテイ」との関連で志向された。21世紀は家族と地域が衰退する時代である。超高齢社会への取り組みからコミュニティを取り戻したい。

神戸医療生活協同組合
神戸協同病院院長
社会福祉法人駒どり理事長
Email VZR07653@nifty.ne.jp

神戸復興塾生より

震災5年目の軌跡をふりかえる

震災５周年の復興検証は単なるデーターの発表だった！

石東都市環境研究室　石東　直子

震災５周年の県の「震災対策国際総合検証報告」のいくつかを拝聴した。予想どうりだった。県の代弁をしたにすぎない内容だった。当然と言えばと～うぜん！　被災地から離れた学者たちが県から提供されたデーターと現地をひとまわりしての発表なのだから。

いくつか拝聴した中で特にひどかったのは、ハードの建設にかかる数量とその短時間の目標達成を誉めたたえるだけものだった。誉めたたえてもいいと思う。しかし、誉めたたえるまでの状況になった背後に何があったのかを検証しないで誉めるのは、検証ではなく、単なるデーターの発表にすぎない。

例えば、応急仮設住宅が「大量かつ迅速」という施策方針のもとに建設し、そして解消でき、「孤独死」と名付けられた悲劇が250名にとどまったのは、そこにどんなサポーターたちがいたのか？　一戸、一戸に声をかけてまわったボランティアたちの粘り強い見守り、仮設診療所のスタッフたちの懸命な健康チェックと指導、ふれあいセンターに息を吹き込んで運営協力してきた居住者とさまざまなボランティアたち。このようなサポートがなかったら、孤独死した人は２倍にも３倍にものぼっていたかもしれない。官製のサポート隊については触れているが、ほんとに支えてきたボランタリーの力を正当に評価し、次の災害に備えてこのようなサポートの確立の必要性を提言できるものでなければ検証とはいえないのではないだろうか。

他方、コレクティブハウジングの供給については一際大きな誉めたたえがあった。しかしこれについても、コレクティブハウジング事業推進応援団、ＬＳＡ（シルバーハウジングの生活援助員）、関電や大ガスの料理教室、２人の熱心な県職員やその他の地元ボランティアたちの入居前から現在にまで続いているサポートがなかったら、居住者たちは新しい住まい方に戸惑い、協同室をめぐっての諍いが今以上に多発し、住みにくい住宅を供給したという発表をせざるをえなかったかもしれない。ひょっとしたらコレクティブハウジングにも孤独死が出ていたかもしれない。そうなれば報告会の発表にコレクティブの名さえものぼってこなかっただろう。さまざまな居住サポートがあったからこそ、新しい試みの住宅供給の名を発表できたのに、そのサポート体制を検証できないのではやはりただのデーターの発表にすぎない。

災害復興公営住宅ではすでに70名に及ぶ孤独死がでている。短期間に大量の住宅供給がなされたことは誉めたたえられる一面であるが、仏に魂を吹き込んでいるさまざまなソフト面のサポートの検証から、住宅供給に必要とされる居住サポート体制の確立を提言できなければ５年間の復興の検証とはいえないのではないだろうか。

６年目を迎えての第２期の復興は、人間復興のためのスタート元年として、適切なソフトシステムの確立に向けて施策を立て直してほしいものだ。

Email　VZZ10701@nifty.ne.jp

この国の５年の歳月

サバイバルネットワーク　松下　哲雄

・・・考えてみれば不思議なことではないかと思う。おそらく明日「第２次関東大震災」に自分自身が見舞われても、ぼくが阪神に思いを込めてきたようには係われないと思う・・・それは何故だか解らないが、おそらくそのことを見とどけようとすら思わないのではないかと言うことだけは、はっきり自覚している・・・・

ぼくの好きなところは神戸であり、東京や大阪ではないことは確かだ、その恋人に初めてあった日のことをいまでも昨日のことのように覚えている。

未明に、車列を組んで大阪のはずれで２国へ入ることが出来た。しかし神戸市役所まで辿り着くには更に６時間余りを費やした、目に飛び込んでくる風景には垂直線も水平線もない、風景全体がゆがんでいて架空の街へ迷い込んだようだ。

空気が黄色くかすんでいて、遠く永田方面から臨海に掛けては随所に黒煙が立ち上がっている、上空には無数のへりが飛び交う・・・ぼくにとってそれは「サイゴン陥落の日」のような風景だった、もってもぼくはその時サイゴンに居合わせたわけではないけれど・・・

アメのようにねじ曲げられた高速道路の鋼鈑、破断された鉄筋コンクリートの支柱、自然の破壊力の前に人間はなにをしても結局抗えないと言うことを目の当たりにした。

交通整理をしている警官が殺気立っているように見える、が動作がきびきびしているだけで、車の窓から道を尋ねると冷静な言葉が返ってくる。倒れた自動販売機から飲料水が取り出されていて小銭が取り出し口に無造作に置かれている、決して少なくない金額だ。

せめて出来るだけ手薄なところへ飲料水を届けようと探し回る、誰もが必要最低限度の量しか受け取らない、それでも受け取って貰えたときの喜びはすごく大きい。

携帯電話に東京から神戸の知人の安否が確認されたとの連絡が入る、なかなか掛からない電話が通じ、生活物資を届けたいと言っても「自分のところは大丈夫だ」と言い、運ぶべきところを教えられる。

極限状態で人間は凛として誇りを失わない存在であることを改めて学んだ、学んだのはそれだけではない、極限の状態で全くと言って良いほど無能な「官」とか「行政府」とかアッチ側の行動原理もついでに充分に学んだ。

ぼくはその時、この国の再生があるとするなら、阪神の復興からはじまると確信した・・・果たして、五年の歳月が流れたいま、この国の正体は次第に明らかになってきた。国民的総意は時の流れで解決したと言う最も効果的（無能と言うべきか）な方法を選択したのだと思う、大変残念ですが・・・

この国には弱者を救済するだけの力がもう無いと思っているのは、ぼく一人ではないはずである。そんなことだから、明日にも第２次関東大震災が来ても、もうぼくは付き合えないのだと思う。

最も、永遠の恋人神戸があるのだからぼくには震災なんか怖くはないのだけれどね。

Email　matt@logix-press.com

書を棄て町に出た民俗学者は、大学に戻って不適応症に悪戦苦闘

大阪外国語大学　森栗　茂一

被災当初、「長田の良さを生かしたまちづくり懇談会」に集った被災市民や、まちづくり専門家と議論してきた。しかし、2年目に入って、学校と現場とのは間で疲れ果てて、３ヶ月、ベルギーでゆっくりと、フリーマーケットを中心としたヨーロッパの市民生活を観察してきた。

その後、真野ふれあい住宅の議論や復興塾の活動に関わらせてもらいつつ、市場の復興レポートを毎月書いてきた。学生とアジアギャザリーのワークショップに参加しつつ、勉強させてもらった。

徐々に、方向は現場問題解決の立会いから、都市の意味とは何かという思考に移っていった。こうした中、大学のエージェンシー化の嵐に突き進み、弱小国立大学の病気状態に絶望している。現場の息吹を、自分の研究や大学教育にとりこみたいのだが、いましばらく暗中模索するしかなさそうである。

あれから、はや５年たったけど。

神戸市会議員　浦上忠文

海山へ祷る神戸の聖夜かな
霊気充つ地震の更地の薄明かり
鶏頭や孤独死をまたひとつ聞く
赤銅の神戸の町の昼寝かな
捨てかねる地震の記録や大掃除
（地震は、古語で「なえ」と読みます）

私は、大丸神戸店俳句部の部長をさせられております。
これが、顧問の先生が選んで下さった、「浦上の震災五句」であります。
まちづくりの問題や、ＮＰＯの研究など、復興塾の提案していくべき課題は急がれるものが多いでしょうが、私はいまだ「喪に服して」おります。
あの年の２月中頃。通りかかった、長田区の御菅地区で、慰霊祭を行っておりました。その時、耳にした自治会長のような人らしい方の弔辞が、いまだに忘れられません。おおよそ、次のようなものです。
あの日の朝、孫を呼ぶおじいさんの声がありました。
おばあさんを呼ぶ、孫の声がありました。
ちちははを呼ぶ子どもの声がありました。
子どもを呼ぶ、ちちははの声がありました。
夫を呼ぶ妻の声がありました。
妻を呼ぶ夫の声がありました。
そんな、すべての声に答えられなかった、
私たちをお許しください
という絶句でした。あらゆる事柄への「可能性への挑戦」が、本来の私のモットーなのですが、しばらくは死者と共に、静かに休ませてください。
近作一句。
何をするあてあるでなし春炬燵

http://www.kitanet.com/uragami/
Email　VEN15775@nifty.ne.jp

あれから５年・・・壊れた食器に教えられた、人の幸せ

ネットワークＫＯＢＥ　喜多　陽太郎

あの時、ヨメサンが大事にしていた食器が全滅した。ウイスキー買ったらオマケに付いてきたような食器ばかりが生き残った。やっぱり雑草は強い？
如何ほど嘆き悲しむかと思ったヨメサン、意外とスッキリしたような顔つき。
「なんかサッパリした気分やわ」「せやけど、壊れてしまうんやったら使ってやったら良かった」
多くの家で食器は全滅に近く、ヨメサンと同じような気持ちになったという話を何度か聞いた。
「サッパリした」というのは何となくわかる。
周りの人たちも同じ状況に陥っているという、連帯感と言うか、安心感と言うか。
そして、当たり前のことだけど「形あるものは何時か壊れる」、そんなことを実感した。妙に納得した。
今まで、食器棚に飾って楽しんでいた高価な食器たち。せやけど、食器って飾って眺めるもんなの？
「壊れてしまうんやったら使ってやったら良かった」。
うん、いいところに気が付いた。当たり前の事やけど。
いい食器を飾っておくことで、人は幸せにはなれない。食器というのは、使ってナンボ。
気に入った食器だからこそ、使って楽しまねば。
でもね、気に入ったコーヒーカップを使うときは、やっぱりそれなりの工夫をしなくてはね。
ちょっと部屋を片付けて、音楽でもかけて・・・家族で会話を楽しみながら。
友達を呼んできて、それこそワイドショーなんかに出てくる下らない話なんかじゃなく、
ちょっと高尚な話題とか、地球の将来なんかの話に花を咲かせながら、・・・
気に入った食器と言うのは、そういった幸せな時間を演出する道具。
飾って幸せになるというのは幻想でしかない。
だって、お隣さんがもっと素晴らしい食器を飾りだすと、自分は「負けた」という不幸な感覚に陥ってしまうのが関の山。
あっという間に不幸せになる、はかない幸せ。
お気に入りの食器を使って楽しくやろうと思ったら、少しは自分をグレードアップしないとね。
そして幸せな時間を一杯作ろう。

「人はモノやお金では幸せになれない」。被災地の多くの人たちが、そんな当たり前だけど非常に大切なことを学んだと思います。大きな犠牲を払って。そして、あれから５年経って、被災地の中でも忘れつつあるこのメッセージを伝えるのが、私にとっての「被災者責任」とでもいうものだと思っています。

神戸市東灘区住吉本町　１－７－３
ネットワークＫＯＢＥ

Email　master@netkobe.gr.jp
http://www.netkobe.gr.jp/
http://www.kitanet.com/

FROM KOBE

２０００年１月１６（日）

第２回こうべｉ（あい）ウォーク開催！

去る１月１６日に行われた「第２回こうべｉ（あい）ウォーク」は、生憎のお天気にもかかわらず、１２校の大学・高校、地元商店街・まちづくり協議会、一般ボランティアなど２００名を超すボランティアにご協力頂き、約２，３００名の参加を得て無事終了しました。このイベントの企画・運営にご協力頂いた皆様にとりあえずご報告するともに、お礼を申し上げます。

なお、当日の募金額は現在集計中ですが、２２０万円を越える見込みです。このお金は全て「しみん基金・KOBE」に寄付致します。

以下は、ゴール地点でとったアンケートの結果と参加者に書いていただいた感想の一部です。

■　このイベントのことを最初に聞かれたのは次のどれですか。

テレビ:23（3%）　新聞：195(22%)　ラジオ：31(4%)　チラシ：126(14%)　ポスター：74(8%)
家族・友人：196(22%)　学校・職場：61(7%)
神戸復興塾からの案内：125(14%)　その他：42(5%)　無回答：10(1%)　合計 883

■　今回はどなたと一緒に参加されましたか。

一人で：264(30%)　学校の仲間：15(2%)　職場の仲間：76(9%)　家族：327(37%)　近所の知り合い：64(7%)　　ボランティアの仲間：17(2%)
趣味やスポーツの仲間:77(9%)　被災者仲間:10(1%)　その他：23(3%)　　無回答：10(1%)　合計 883

■　参加の動機（あてはまる項目全部に○印）

昨年も参加したから：246(28%)
ボランティア活動支援基金集めの趣旨に賛成だから：298(34%)
震災記念行事に参加したかったから：319(36%)
被災地の復興の様子を見たかったから：420(48%)
よく知っている場所を訪ねられるから：93(11%)
歩くことが好きだから：107(12%)
ボランティアに関心があるから：105(12%)

面白そうだったから：63(7%)
先生や家族友人などに誘われて：90(10%)
その他：19(2%)　無回答：34(4%)　合計：883

■　ボランティア活動資金を集めるためにどんな方法が良いと思われますか。

今回のように参加者寄付型のイベントを増やす

合計	賛成	反対	わからない	無回答
883	769	10	61	43
	87%	1%	7%	5%

赤い羽根のように駅前などで募金活動をする

合計	賛成	反対	わからない	無回答
883	253	188	294	148
	29%	21%	33%	17%

自治会町内会の会費に上乗せして集める

合計	賛成	反対	わからない	無回答
883	135	356	235	157
	15%	40%	27%	18%

国や自治体の助成金を増やす

合計	賛成	反対	わからない	無回答
883	548	66	138	131
	62%	7%	16%	15%

各ボランティア団体がそれぞれ集める方が良い

合計	賛成	反対	わからない	無回答
883	266	110	334	173
	30%	12%	38%	20%

■　性別

合計	男	女	無回答
883	418	377	88
	47%	43%	10%

■　あなたの被災状況

合計	全焼	全壊	半焼	半壊	一部損壊	被災なし	無回答
883	31	80	20	80	20	20	632
	4%	9%	2%	9%	2%	2%	72%

■　年齢

合計	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	無回答
883	23	51	85	51	85	85	503
	3%	6%	10%	6%	10%	10%	56%

・１時２０分多分最後の受付け通過者だったと思いますが２時間でゴールイン！！今３時３０分だそうです。いやーよくやった。神戸の下町の下町長田区を始めて歩きましたがよい所ですね。復興状況がまだまだである事に驚きでした。いつも電車の窓から見下ろしているだけで復興住宅がたくさん見えて「おー、だいぶ回復したなぁ」と思っていたのに、実際に街を歩くと虫食いだらけというかちらほらとしか回復していなかった。兵庫駅周辺からはだいぶ街っぽくなっていて、神戸元町あたりはもうすっかりといった感じでした。まだまだ生活が大変な市民はたくさんいます。市全体の復興、景気回復の対策：空港の建設もいいかもしれませんが、それをする前に、見落とされている人々がいないかもう一度被災者復興の足跡を振り返ってみてはいかがでしょうか？行政のみなさん！震災の傷はまだ癒されてはいないように思えます。2000.1.16ｉウォークを終えて
・同じ神戸に住んでいながら垂水では感じなかった被害の大きさに涙が出ました。
・初めて参加しました。今までは華やかなおしゃれな街神戸のイメージを持っていた私ですが、まだまだ地震のつめ跡が残っている現実を知りました。名古屋から来ましたが、名古屋では地震の報道や情報がほとんど流されていません。せめて、1/17は忘れてはいけない日なのでこのようなイベントでアピールしていかなくてはいけないのでしょうか。もっと市民を大切にしてた行政であって欲しいと思いました。ボランティアの方、お疲れ様でした。同じくらいの年の方のがんばりに力をいただきました。
・初めて参加しました。震災当時は末娘は小学３年生。今日は一緒に歩きました。震災一週間くらいの事はよく覚えていないという娘をいろいろな話をしながら歩きました。良い思い出になったと思います。途中ボランティアの方々お世話になりました。来年も歩きたいと思います。

復興塾近況

■　こうべｉウォーク(担当:小森塾長,池田他全塾生)
　１月　８日　ボランティアオリエンテーション開催
　１月１６日　ｉウォーク実施。
　２月　１日　実行委員会打ち上げ
■　神戸市調査研究(担当：大津，田村，野崎，三谷)
　２月　２日　吾妻小学校見学
　２月１７日　神戸市調査研究打ち合わせ
　２月２５日　調査研究委員会開催
■　NPOと行政の生活復興会議(担当：野崎，田村)
　１月２９日　NPO部会開催
　２月　７日　全体会議開催

今後の活動

■　事務所移転　藤本ビルは４月一杯で契約解除し吾妻小学校の支援センターに入居を予定。NPOコレクティブオフィスを計画中。
■　タイズ財団会長招聘　６月中旬にパイク会長を招聘し、「しみん基金KOBE」と共催で全国５カ所で講演会を開催。(担当：吉富、山田、田村、野崎)
■　まちづくり塾　日本建築士会連合会まちづくり委員会主催の第８回まちづくり塾を復興塾が受託して開催。６月２～４日予定。(担当：小林)
■　塾勉強会　新野幸次郎塾顧問を予定。日程未定。

「神戸まちづくり研究所」について

３月１日かねて申請中の特定非営利活動法人「神戸まちづくり研究所」(略称「まち研」)がやっと認証されました。「まち研」は塾の精神を継承しながら、より計画的、持続的な取り組みを通じて独立独歩のシンクタンクを目指します。　事業内容は要約すると次の３つになります。

●まちづくりに関する調査研究と政策提言。
●震災復興に関わる研究グループやNPOのネットワーク支援。
●出版やイベント等まちづくりや地域活性化を促進する事業。

「しみん基金KOBE」や「市民活動センター神戸」「コミュニティサポートセンター神戸」といった他の中間支援組織と連携しながら、「現場の知」を活かした専門家集団として、まちづくりの啓発普及と支援活動を行います。独自の研究テーマを持つ新しいメンバーを歓迎致します。

「知」のインターミディアリーをめざして
～ビジョンの「復興塾」、プロセスの「まち研」～

田村太郎

昨年７月の総会から半年の期間を経、特定非営利活動法人としての認証も得ることで、いよいよ外堀が埋まって、「神戸まちづくり研究所」は４月にはようやく重い腰を上げる。昨年の議論をふりかえって、もういちど、「復興塾」と「まち研」は何を目指そうとしているのか、考えたい。

震災１周年に大津さんが仕掛けた「市民語り部キャラバン」は画期的だったと思う。外への発信を意識して語る行為は、それだけで重要なことだった。キャラバンを母体として発足した後も、内外のゲストを迎えてあるべき社会のイメージを深め、また提示してきたのが「神戸復興塾」の軌跡だった。一方で、あるべき社会の姿を議論しながら、そこへのプロセスについての具体的な議論は、深める余裕がなかった。新しいことに全力を注ぐ一方で、ひとつのことに時間をかけてこなかったし、またそれを得意としてきた。

復興塾に限らず、現在市民活動が抱える課題はこのあたりにあるのではないだろうか。あるべき社会についての議論はあちこちでなされているが、それを実現する方法については議論が少ない。またそう簡単にはできないと、議論を後回しにしてきたのではないだろうか。規模は小さく、自由で、時間をかけて議論することを市民活動の美徳とするあまり、責任を持って一定の期間にあるべき社会の実現のための方法を明示することには優先順位をおかなかったのではないか。被災地での５年間は、市民活動に取り組む人たちにとっては実りの多い５年間だったかも知れないが、その他の市民にとってはどんな成果があったのかよくみえない５年間だったのではないか。(もちろん、成果はあったのだが。)

「まち研」に期待されているのは、「復興塾」や他のシンクタンクが行っているようなビジョンを描くことではなく、数多くのビジョンの中から市民に必要なものを絞り込み、それを確実に実現させるためのプロセスを研究し、提示することだと思う。いま必要なのは具体的な行動とそのための計画だ。ビジョンを語るだけでなく実現させることに重きをおいて、社会のさまざまな資源を組み合わせ、ダイナミックな仕組みをえがきたい。

「またふろしき広げて...」といわれるかもしれないけれど、これまでの市民活動の常識もこえなければ、今日の閉塞感は乗り越えられない。「復興塾」も新しい塾生をどんどん取り入れて刻一刻と変わる状況に応じて人材を確保し、ビジョンを描き、「まち研」はその実現のための具体的な行動計画を提示する。そのためには「復興塾」だけでなく、多くの市民団体にとっても「知」のインターミディアリーとして頼りにされる研究所でなければならない。

行政とのパートナーシップだけでなく、市民とのパートナーシップによるシンクタンクをめざそう。

ーーーーー

コミュニティのためのシンクタンク「神戸まちづくり研究所」が４月より活動をはじめます。拠点もメンバーも新たに強化する予定です。調査や研究のご用がありましたら、「まち研」を御指名ください。
(現在の連絡先は塾事務所と同じです)

『編集後記』
原稿を集め始めた頃はまだ梅の便りも聞こえてこなかったのに、最早桜前線の話題が･･･
by でん

神戸復興塾
神戸市中央区下山手通　2-12-26　藤本ビル　４Ｆ
TEL：078-326-7887　FAX：078-326-7890
Email：LET07723@nifty.ne.jp　〒650-0011
（メールアドレスが変わりました）
HomePage:http://www.survival.org/fukkoujuku/